

## 〈特集：東アジアのナショナリズムの相剋／国際民主主義の可能性〉

上記のテーマで日韓共同国際フォーラムが、2015年8月6日・7日、吉野作造記念館において開催された。

### 開催主旨

吉野作造は、今からちょうど100年前（1916年4月）に韓国を訪れ、朝鮮の人々と対話し、実際の生活を目にすることにより、日本の植民地支配のあり方を厳しく批判するようになった。

本特集のもとになった国際フォーラムでは、総計25名（日本16名、韓国8名、中国1名）の研究者が、吉野作造と韓国とのつながりを中心に、東アジアの過去・現在・未来に関わる濃密な議論を展開し、100年前の吉野の志を継承発展させるような、民間主体の学際交流を、国境を越えて深める成果を収めた。本特集は、この会議での討論をふまえ、あらたに起稿（改稿）された論文等によって構成されている。

吉野は、どんな人間にも「神の子」としての霊性のはたらき（人格）を認めていた。霊性とは、人間の理性や感性では認識できない魂の響き合いを指す。吉野は世界が「暗い時代」へと向かう中で、自己と他者の間にはたらく霊性を、互いに善なる光の方向へと更新し続けるところに、ナショナリズムや全体主義に流されない「国際民主主義」の人格的基盤を築こうとした。本特集が、本誌の内容にふさわしいと判断するゆえんである。

フォーラムは、2015年8月5日から8日にかけて開催された。実質的な会議日は6、7の二日間である。その前後に、韓国からの参加者とともに「安重根と千葉十七の記念碑」のある宮城県栗原市の大林寺などを訪れたが、それらについては省略する。ここでは、フォーラムの準備を献身的に担ってくださった小嶋翔（吉野作造記念館）、鈴木啓孝（韓国・東義大）、松谷基和（当時、東北大）、森川多聞（東北大）ら諸氏に対する感謝の意だけを述べるにとどめたい。なにしろ、フォーラムの準備の研究会だけでも、4ヶ月間で13回という驚異的なペースだったからである。

会議初日である8月6日は記録的な猛暑で、まさにヒロシマに原爆が投下された朝と同じような真っ青な空が、会場となった吉野作造記念館（宮城県大崎市古川）の上に広がっていた。記念館でも「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を開催していた。ヒロシマ・ナガサキは過去の話ではない。また日本人だけの悲劇ではない（被爆者総数の約1割が朝鮮人）。大川真記念館館長による開会挨拶でも、「デモクラシーと東アジア世界の友好・平和のために、文字通り身命を賭した先人達の営みを今こそ振り返る時」と述べられた。

つづいて、片岡による趣旨説明。これは当日の趣旨文を、ほぼそのまま掲げておきたい。

今回のフォーラムのために、韓国から、日本各地から、この東北の地にお集まりいただいたことに対し、感謝の言葉を申し上げます。

東北地方は、韓半島における西北（関西）地方（黄海道、平安道）と似ているのではないかと思います。また、東北が「日本のスコットランド」と呼ばれたことを朝鮮がアイルランドに譬えられたことと比べてみるのも、面白いと思います。さらに、平壤は「東洋のエルサレム」と呼ばれましたが、この古川や仙台も、キリスト教のさかんな地でした。

今回のフォーラムの題目は「東アジアのナショナリズムの相剋／国際民主主義の可能性 ―近代日韓知性の思想と実践」ですが、わたしたちは日本と韓国というナショナルな立場から、「相剋」することは望みません。そうではなく、日本と韓国の間（際）に立って、両者を結びつけることを望みます。

そして、日本人、韓国人である前に、互いに一人の「人間」として、隔意なく語り合うことを望みます。一人の「人間」として、吉野作造、安在鴻、洪命熹らに対して恥ずかしくない「知性」として振る舞えるか、ここに今回のフォーラムが成功するか、失敗するかの鍵があると考えます。

わたしたちは、吉野、安在鴻、洪命熹よりも後の時代に生まれた以上、彼らよりもさらに進歩発展している責務があります。そうでなければ、彼らが彼らの時代の世界を懸命により良くしようとした甲斐がないからです。しかし、現実はどうでしょうか？

たとえば、吉野は朝鮮人留学生らと話すために、エスペラントを学びました。洪命熹もエスペラントをはじめ多様な外国語を学んでいます。それに比べ、わたしたちが通訳に頼って議論するのは、むしろ後退していないでしょうか？

しかし、同時に、わたしたちがやはり「日本」人、「韓国」人であることも、無視できない事実です。それをしっかりと自覚していないと、自分は世界市民のつもりでも、気づかないうちに、「民族」や「国家」などの枠に支配されているような例は、たくさんあります。

この点においても、吉野が晩年に明治文化の研究を行ったり、安在鴻が『朝鮮上古史鑑』を著述したり、洪命熹が『林巨正伝』で「朝鮮の情調」を表現しようとしたことに、注目する必要があります。彼らは、過去世代の文化を現在に受けとり直して、それを将来世代に伝えようとしたのではないのでしょうか？彼らにとって将来世代のわたしたちも、やはりそれを受けとり直す、すなわち一歩進める必要があります。

ハンナ・アレントは、政治とは、異なったものどうしが間（際）をつなごうとする営みだと言いました。この間（際）は、空間的にも、時間的にも考えられます。わたしたちは、日本と韓国の間（際）に立つと同時に、過去世代と将来世代の間（際）に立って、それらを結びつける必要があります。

その意味で、今回のフォーラムでは、最後の「総括」を、将来世代の学生たちにお願ひすることにしました。わたしたちは過去世代に恥ずかしくない振る舞いをめざす

と同時に、将来世代の学生たちから馬鹿にされないような、彼らに希望（エスペラント）を抱かせるようなフォーラムをめざせればと思います。

また、ここには政治学、宗教学、歴史学、文学、さらには考古学など、学問的ディシプリンを異にする多様な専門家が集まっています。こうした立場は一つの視点に過ぎず、だからこそ「話し合う」必要があると、アレントは説いています。そして、一つの立場が絶対化し、他の立場を絶滅させるなら、それは政治的意味では、世界が終わったことと同義だとも。わたしたちは、このことにも注意して、討論を進めたいと思います。逆に言えば、相手の立場を尊重し、互いを結びつけるための「相剋」であれば、むしろ必要な過程と考えます。

最後に、皆さまに個人的なお願いがあります。わたしは今回のフォーラムのテーマに関しては専門ではありません。しかし、今回のフォーラムの準備のために、わたしなりに精一杯勉強してきました。

その過程で、グレゴリー・ヘンダーソンの次の言葉は、わたしにとって大変説得力がありました。

「日本人は日本人なりに比較的長期にわたり朝鮮を観察し、多くの分野で実りある業績をあげたが、政治はそのなかにはいっていなかった。日本の朝鮮併合時代に衰退したもののなかで、政治はその最たるものであった」（『朝鮮の政治社会』「日本語版によせて」）

そして、もしも吉野作造を、わたしたちが再評価するなら、日本に存在しない「政治」（アレントの言う意味での）を、ほぼ唯一、あの時代に実践しようとしたところにあるのではないかと、そして、その意味での「政治」は、安在鴻や洪命熹などにもあるのではないかと、そして、そこに「国際民主主義の可能性」があるのではないかと、考えるようになりました。

もちろん、これは素人の意見です。しかし、もしもどこか取り柄があるなら、ぜひ、このフォーラムで、それをより深めていただければというのが、わたしの個人的希望であります。

以下、本誌に載せられた以外の発表内容を、かんたんに紹介しておこう。

尹大植「事大と自主」は、植民地期の韓国をアレントの言う「暗い時代」とし、そこに光（公的領域）を復元しようとする努力を、政治的にどのように評価するかというものであった。対象とされたのは、儒学者集団、植民地知識人らの対中国・日本認識。そこには、どちらにも光と陰が交錯していた（この点では吉野も同じ）。しかし、韓国の政治的アイデンティティの誕生はここにしかなく、現在の韓国にもつづいている問題である。

小嶋翔「吉野作造と在東京朝鮮人留学生」は、吉野の思想を、帝国主義の枠内にとどまる「限界」をもつか、その枠を乗り越えることのできた「意義」をもつかという、従来の研究の二分法的見方をこえるために、吉野と留学生や革命運動家・独立運動家たちとの直

接的な交流の空間を、より具体的に描き出そうとした。そこから浮かび上がるのは、紛糾しがちな「民族」の問題においても対話を可能にする価値多様な思想状況を創出しようとする吉野の姿である。

朱琳「大正知識人をめぐる『中国』」は、吉野と長谷川如是閑を並べ、その同時代人としての共通性を探り、「中国」観の異同を比較するものであった。共通点は、両者とも「国家」と「社会」を区別し、それが彼らの「中国」認識のあり方を規定していること。にも関わらず、吉野は中国を「普遍」的な存在と見、国民国家の形成可能性にも楽観的であり、知識人の役割を重視する。それに対し、長谷川は中国の「特殊」性に意義を認め、西洋近代国家に倣う必要もなく、民衆の「生活」を重視する。この違いは、吉野は莊子を、長谷川は老子を好んだという微妙な違いとも通じるかもしれない。

松谷基和「押川方義と朝鮮」は、東北学院の設立にも尽力した押川方義らの朝鮮との関わりを、たんに「政治」的観点からだけでなく、「宗教」的次元も視野に入れ、総合的・多面的に評価しようと呼びかけるものであった。着眼点は、従来政治的評価が日清戦争以後しか見ないのに対し、押川はそれ以前から朝鮮に対するキリスト教伝来計画に関与していた点。そこには、明治期のクリスチャン第一世代としての独自の使命感や、国境や民族を超える国際的な交流関係—当時はまだ珍しかったハングル活字を用いた朝鮮の詩歌や文学の紹介などまでも—が見られ、教育を通じて朝鮮基督教会の礎石となる人材を育成しようとするビジョンをもっていたことが窺われる。

鈴木啓孝「誰が東亜に「調和」をもたらすのか」は、陸羯南が『原政及国際論』で論じた危機への「対案」は、たしかに時代錯誤だったが、その「状況認識」と「状況批判」は、むしろ現在の日韓両国でこそ意義をもつという視点から、同書を読みなおしたものであった。陸の危機意識と怒りは、日本国内の状況—ヨーロッパの「猿まね」にすぎない「競争の法則」の蔓延—に向けられたものである。それは非人間的・動物的社会の出現への警鐘を鳴らすものといえ、現在の人文学は、そうしたアンチ・テーゼを突きつける力さえ失っている。

なお、指定討論には、小倉紀蔵、浅野豊美、佐野正人、洪元杓、今高義也、森川多聞、李宅善、石田徹、尹大植の諸氏が当たり、貴重な意見が多数示されたが、残念ながら、それも割愛させていただく。

また、通訳は松谷基和、宣芝秀、陳宗炫、劉田夏の諸氏が担当されたが、きわめて質の高いものであった。総計3時間の総合討論と発展討論によって、たんなる個別発表の寄せ集めではなく、文字通りの「共同研究」が可能になり、フォーラムの全体テーマに対する発展的な認識の共有にいたったのは、ひとえに諸氏のお陰である。また、自身の発表や討論を、みずから韓国語で行った者も少なからずいた。これも従来の日韓シンポなどに比べると、間違いなく大きな前進である。

丁濟峯、青野誠、佐々木隼相、崔多蔚の学生諸君には、会場の設営だけでなく、最後にフォーラムの総括を述べてもらった。日韓の学術交流を担う次の世代として育てられる

ことを期待させる内容であった。

なお、本フォーラムと本誌の刊行は、東北大学文学研究科「平成 27 年度研究科長裁量経費」から経済的支援を受けた。その事業である「東北からアジア／世界へ」（責任者：片岡龍）は、「アジア／世界の基層文化としての東北の文化資源を、学際的・国際的に共同研究し、国内外に発信」しようとするものであり、来年度以降も継続される。来年度の責任者である阿子島香氏は、本フォーラムの会議二日間を全日にわたって参加され、最後に、われわれの努力が報いられる思いのする熱い感想を述べてくださった。

フォーラムの準備から数えると、本誌刊行までに 1 年 3 ヶ月を費やした。あつというまだったが、中味はぎっしり詰まっている。何よりも、共に研究する喜びと感動を味わえたことは、わたしにとっては最大の幸福であった。本フォーラムに協力していただいた、すべてのみなさんに、あらためて感謝の辞を述べたい。

東日本大震災からちょうど 5 年目の 3 月 11 日

片岡龍



フォーラム当日（2015 年 8 月 6 日）、吉野作造記念館にて